

# 円弘は新羅僧侶か

——『法華経論子注』の引用文献を中心として——

金 天 鶴

〔抄録〕

本稿は世親の著述と言われている『法華経論』に対する著述の中で『法華経論子注』三巻の著者である円弘が新羅人であることを証明するための論文である。

インドの思想家である世親によって『法華経論』が著述されたが、それが思想的に重要な根拠として活用されたのは中国で翻訳された以降であり、さらに東アジアでは『法華経』を理解するための重要な解釈根拠として利用された。新羅の法華思想史もこのような流れの中で展開されたことは義寂・義一撰の『法華経論述記』で確認することができる。

ところで、最近、円弘の『法華経論子注』が金沢文庫と聖語蔵に存在することが明かされ、これを入力して詳しく分析することができようになった。円弘の著述は七三二年にすでに『円弘師章』が、七四八年に『法華経論子注』（以下『子注』と略称する）が筆写さ

れる。すなわち、円弘は七三一年以前に著述活動をしたということである。このような円弘の活動年代を念頭に置いて円弘が新羅人であるということを証明するため大きく二つの方法を使用した。一つは円弘に対する諸資料を通して円弘が新羅人であるという仮説を証明しようとした。二つ、『子注』の引用文献を通して円弘が新羅人であることを証明しようとした。

一つ目の方法の結果を整理すると次のとおりである。まず、法相唯識の基と対比される新羅人のグループに円弘が属しているという事実である。次に新羅表員の『華嚴経文義 要決問答』（以下『要決問答』と略称する）と説明方法が一致するという点である。円弘の『円弘師章』を注釈した理門（生没年不詳）は大賢の著述にも復注を著述する。このように新羅法相唯識を尊重するという点で、円弘もなお新羅人の可能性を念頭に置くことができる。

二つ目の方法の結果を整理すると次のとおりである。『子注』の

引用文献を通しては義寂、元暁、義相と一致する例を、各々二回、三回、一回程度を見出して証明した。その中で義寂の一例は文章が正確に一致して、元暁の二回と義相の一例は用語が正確に一致することを確認したのであるが、先に言及した新羅表員の著述との関連を考慮すると円弘が新羅僧侶の著述を読んだと断定することができると。ただ、引用事実を通して円弘が義寂などより後の人物であるという証明にはならない。同時代に活動したとみることもできるからである。したがって、年代については問題が残っているが、新羅人の著述をみたという点から円弘が新羅人であることを証明したと考えられる。

一方、写本をより綿密に検討すれば、新羅僧侶の文献を引用した痕跡をさらに見出すことができるであろう。このような問題を含めて、今後、細密な注釈を通して、もう一つの新羅人の注釈書、円弘の『法華経論子注』について研究して、義寂、元暁、憬興など、新羅僧侶と比較して、本文を新羅人の法華思想史に追加しようとする。

## I はじめに

世親の著述と言われている『法華経論』（『妙法蓮華経憂波提舍』）は『妙法蓮華経』に対する注釈書で「『法華経』の案内書」という程度の意味である。『法華経論』は二回漢訳されたのであり、一つ

は勒那摩提 (Ratnamati) などの訳と、もう一つは菩提留支 (Bodhiruci) などの翻訳で、二つとも現存して、梵文は確認されていないのである。<sup>(1)</sup> 『法華経論』は「序品」と「方便品」、「譬喩品」で構成されている。大竹晋の最新の研究によると、『法華経論』に対する中国僧侶の著述としては吉蔵、賈法師、道栄、淡延、作者不明の四種で、総八種の著述が目録上に残っていて、この中で吉蔵の『法華論疏』三巻だけが現存する。新羅でも注釈書が著述されたが、義寂・義一撰『法華経論述記』二巻（或いは三巻）、神雄『法華論集解鈔』二巻、円弘『法華論子註』三巻が紹介されている。日本でも平安時期まで明一、行賀、常騰、護命、最澄、円珍などが注釈書を著述したのであり、円珍の『法華論記』十巻が現存する。一方、漢訳者である菩提留支が直接『疏』三巻を著述したという目録も確認され、吉蔵の『法華論疏』に『法華経論』の翻訳などをめぐる事情を詳細に記述しているが、菩提留支が『疏』を著述したという記録をみることはできない。したがって、現在としては先の目録の信憑性については疑いの余地が十分にあると言えよう。

インド思想の二つの潮流は中観（学派）と瑜伽行学派である。その中で瑜伽行学派の論師である世親によって『法華経論』が著述されたとしても、この文献が学派を形成するにあたり一定の役割を果たしたとは言えない。<sup>(4)</sup> しかし東アジアでは『法華経』を理解するための重要な解釈根拠として利用されたばかりでなく、中国法華思想史は『法華経論』解釈史とその流れを同じくすると解釈するほどに

重要な経論であることに違いない。<sup>(5)</sup>

先に紹介された新羅人の著述の中で、まず神雄の『法華論集解鈔』は義天の『新編諸宗教蔵総録』に出てくるもので、大竹は新羅道証の著述である『成唯識論要集』に対する復注『成唯識論要集決明章』四卷と『成唯識論要集略述』十巻を著述したことからみて新羅人と推定する。<sup>(6)</sup>道証の著述を復注することからみて新羅人の著述である可能性が十分にある。

義寂釈・義一撰『法華経論述記』（以下『述記』と略称する）については朴妯娟の研究に詳しい。<sup>(7)</sup>この研究に従い『述記』の特徴をかいつまんでみると次のとおりである。まず、文献学的な面から『述記』は先に紹介した二つの翻訳のうち、菩提留支本『法華経論』を解釈した。解釈内容は、「序品」と「方便品」の前の部分に対する解釈で終わり、完結本（「全体」）の半分程度が残っていることになる。引用としては和\*尚（上）が最も多く十二回、吉蔵が十回、慈恩が七回、慧浄が三回であるが、吉蔵の説は大部分『法華論疏』を、慈恩の説は『法華玄賛』を、慧浄の説は『妙法蓮華経續述』を典拠とする。義寂と義一の著述関係については、前半部は義寂の釈、後半部は義一の撰に該当するという。一方、思想的な特徴としては新唯識の五姓各別説とは異なり趣寂声聞の成仏を認めていることを挙げるができる。玄奘三蔵の門下であるにも関わらず、種姓論においてその趣旨を異にする点は新羅的な特徴として膾炙されることもある。

新羅人の著述の中で最後に紹介された円弘については大竹の解題では円弘が新羅人であるという推定に止まった。本稿は『法華経論子注』を著述した円弘が新羅人であることを積極的に証明することにより、今後、『子注』を新羅僧侶の著述として本格的に研究するための序説に該当する。具体的には章を改めて叙述する。

## Ⅱ 円弘について<sup>(8)</sup>

円弘の出身地については現在決定的な情報がない。ただ、円弘に対する様々な情報を総合することにより出身地が新羅であることを推定することができる。円弘が新羅人であるという仮説を証明するため円弘に対する資料を集めると次のとおりである。

まず、円弘の名前が記録された章疏を検討する。大竹は安然『教時諍論』<sup>(9)</sup>に玄隆、神昉、太賢の名前が次第に明記されることを通して玄隆、神昉、太賢が皆新羅人であるためにその中に明記された円弘について新羅人であると推定した。<sup>(10)</sup>『教時諍論』の関連文章を検討すると次のとおりである。

玄奘三蔵の門人義寂法師は『義林章』十二巻を作ったのであり、これにより基師の『法苑義林章』を論破した。遁倫法師は『瑜伽疏』を作ったが、彼が立てた義理は基の義理とはずいぶん異なった。玄隆、円弘、神昉、太賢も並びに章疏を作ったが、と

もに三歳の趣旨を得たと自称するが、基の義とは大きく異なつた。<sup>①</sup>

ここでは新羅の義寂、遁倫、玄隆、神昉、太賢が並びに玄奘を継承しながらも、基とは思想的立場が異なることを述べている。この中で円弘を除いては皆な新羅学僧であることが明かされている状態である。安然の陳述を通してみる時、新羅僧侶たちは基の反対派である。そのような部類に円弘が属しているのである。したがって、大竹の推定は可能性が高い。

奈良時代の護命（七五〇—八三四）は円弘の著述を尊重した。宗性（一二〇二—一二七八）の『日本高僧伝要文抄』第三には（次のようにある。）

護命僧正の伝記には護命が十歳に当洲金光明寺の道興法師に道を受け、兩年にわたり『法華経』・『最勝王経』二部の音と訓を渉獵したのであり、『百論』とそれに対する円測法師の『疏』一卷、そして『円弘師章』四巻を暗誦したという。<sup>②</sup>

これにより護命が円測と円弘の著述を尊重したということが分かる。護命は元興寺系の人物で、新羅に留学した神叡の流れを汲みながら、新羅と密接な関連がある人物とみることができるといえる。このようなことは彼が七十三歳の時に新羅僧侶から学んだ有為無為法に対す

る立場を八十歳の晩年まで堅持していることから十分に説明が可能である。<sup>③</sup>このように得度の時から最晩年まで新羅僧侶を尊重したという事実からみれば、護命が円測の著述とともに重視した『円弘師章』は新羅僧侶が推薦した法相唯識文献であり得ようし、この場合、円弘が新羅人である可能性はさらに大きくなる。

次は書写記録を検討する。正倉院古文書の記録によると、先に言及した『円弘師章』のほかに『法華論子注』も筆写のために記録されている。『円弘師章』は『円弘章』四卷（七三一年）をはじめとして『円弘師章』、『円弘章疏』などの異称で七六七年まで三十回以上記録されている。<sup>④</sup>これにより円弘が少なくとも七三一年以前に活動した人物であることが分かる。一方、『子注』は七四八年から七六七年まで十五回程度筆写のための記録がある。その中で本稿の中心である『子注』に対する記録をみると、次のようなタイトルになっている。<sup>⑤</sup>

※タイトルは初めて出てきた記録を提示する。（ ）は記録された年度。

法花論子注 中卷（七四八）

法花子注 下卷（七五〇）

法花論子注一部 三卷（七五一）

法花論子注一部 三卷 円弘師注（七五一）

法花論子注 一卷 円弘注（七五二）

法花子注 三卷(七五四)

法花論子注 三卷 尊者舍利弗(七六三)

法華經論子注 三卷 尊者舍利弗(七六七)

法華經論子注 三卷(七六七)

このような記録から『子注』の著者が円弘であり、上中下三巻であったことが分かる。そして七六三年からは「尊者舍利弗」が著者のように記録されたことも分かる。実際に日本名古屋の七寺所蔵の平安時代末期の写本である『古聖教目録』には「舍利弗述」と記録されている<sup>(16)</sup>。しかし、これは下巻の初めに「尊者舍利弗説偈」(一紙三面)となっている部分が著者と誤って誤認され記録された例である。

次に円弘著述の逸文を見出すことができる。以前の発表では『成唯識論本文抄』、基弁の『大乘法苑義林章師子吼鈔』、良算の『唯識論同学鈔』、忠算の『四分義極略私記』、凝然の『五教章通路記』・『孔目章發悟記』・『華嚴』十重唯識瑠鑑記』などに引用が確認されたと報告した<sup>(17)</sup>。以降『円弘師章』の逸文は『冠註五教章』からも確認され<sup>(18)</sup>、最近の研究によると、凝然の『華嚴二種生死義』からも確認される<sup>(19)</sup>という。

『円弘師章』の逸文については一部を検討した結果、基と解釈が異なるため批判される例を報告したのであるが、忠算の『四分義極略私記』では肯定され、また凝然の『五教章通路記』では真諦訳の

『唯識論』を使用する例もみることができ<sup>(20)</sup>。しかし、安然が記述したように基と反対される立場に立っているということが証明されたことになる。

ところで、『華嚴』十重唯識瑠鑑記』(巻第七)には「円弘法師は四巻章を造り、円弘章というのである。彼の〔第〕一卷に唯識義があるが、三門に分別したのであり、第一は名称を解釈する、第二は本体を明かす、第三は問答である(円弘法師造四巻章。名円弘章。彼〔第〕一卷有唯識義、三門分別。一釈名。二出体。三問答)となつてい<sup>(21)</sup>る。主題を三門に区別する例はよくあることであるが、それを「一釈名。二出体。三問答」に分けて説明する例は新羅表員の『華嚴經文義要決問答』の説明方式と唯一に一致する<sup>(22)</sup>。

このように『円弘師章』の逸文内容を通しては基と反対意見を披歴したという安然の説を確認することができ、また表員の『要決問答』と説明方式が一致しているため円弘が新羅人でありながら、表員と同時代の人物である可能性をさらに高めてくれる。

一方、京都の法金剛院所蔵の平安時代前期の写本目録である『大乘経律論疏記目録』には「円弘章記二巻 理門師」という記録がある<sup>(23)</sup>。同目録集には『本母頌記』二巻と『卒料』一部三巻の著者が理門となつてい<sup>(24)</sup>るが、同一人物であろう。『卒料』については未詳であるが、『本母頌記』は大賢の『広釈成唯識論本母頌』三巻に対する注釈であろう。理門によって両師の文献の注釈書が著述されることからみて、理門が二僧侶の著述を相当に尊重したということが

分かる。これに似たような例は先の護命の伝記からも確認されたのであるが、円弘が太賢と同じように新羅系の法相唯識学者であったために尊重されたと推定される。<sup>26)</sup>

これまで様々な情報を通して円弘の出身について検討した。①安然の記述、②新羅僧侶と密接な護命の『円弘師章』重視、③『円弘師章』の逸文から確認された新羅表員との関係、④円弘と太賢の著述に復注をなした理門の存在、⑤正倉院古文書の記録という五つの情報を総合してみると、円弘が七三一年以前に活動した新羅法相唯識学者であることが十分に証明されたと考えられる。次は『子注』の引用文献を通して円弘が新羅僧侶であることを証明しようとする。

### Ⅲ 円弘の『法華経論子注』について

#### 1 現存本『法華経論子注』紹介

まず「子注」「という」形式について辞典的意味を『漢語大辞典』に沿って紹介すると、本文を母に比喻して、本文の横に小さく書いた注を子に比喻する形式として仏教注釈学において重要な注釈形式に属する。<sup>27)</sup> 現存「本の」形式も本文を太字（「大きい文字」）にして、子注は本文の下に小さい文字になっている。仏教文献において「子注」と名称が付いた文献は確認可能であるが、<sup>28)</sup> 現存するものとしては『法華経論子注』が唯一である。

現在『子注』は金沢文庫本と聖語蔵本が現存する。まず聖語蔵本は聖語蔵甲種写経No一九八\*九（七）で『子注』三巻の中で上巻が卷子として穏全に現存する。卷子の軸と本文と本文の背面（軸面）には「軸に」「法華論経子注 卷三」と、本文尾題に「法華論経子注卷第上」と、紙背に「法華論経子注卷第三」となっているが、おそらく全体巻数を表示したものとみられ、書体は「本文と」互いに異なる。写本の終わりの部分には「法華論経子注卷第上」となっていて写本が三巻中の「卷上」に該当することが分かるのであり、内容は「法華」経論（以下「経論」と略称する）「序品」に該当する。金沢「文庫」本は冊子形式で筆写されているが、これについては具体的に紹介しながら現存下巻の『子注』が下巻全体の半分にも満たない分量であると推定した。<sup>29)</sup>

一方、両本の書体はまったく異なる。これにより両写本の筆写年代が異なるということが分かる。このように現存本『子注』は中巻に該当する「方便品」に対する注釈が欠落されたのであり、「序品」全体と「譬喻品」一部が残っている。両写本の題名は「経論」と「経論」で筆写され互いに異なるが、古文書の筆写記録などを勘案すれば、「経論」が正しいであろう。

『子注』で引用形式を整えて引用される文献は「経」と「論」だけである。まず、上巻では「涅槃経」（一回）、「華嚴経」（\*二）（三）（回）、「本業経」（一回）、「正法華」（一回）、「智度論」（一回）、「対法論」（一回）に止まる。下巻では「華嚴経」（一回）、「無性撰論」（三

回)、『梁撰論』(\*一(二)回)程度である。ところで、たとえ引用名を使用していないが、字句に対する検索を通してみる時、円弘の『子注』からは中国の吉蔵、慧浄、慈恩基、新羅の義寂、元暁、義相を援用した痕跡を見出すことができる。この中でとくに、義寂、元暁、義相の痕跡を見出すことができれば、円弘が新羅人であることを十分に証明することができるであろう。なぜなら、当時、中国人の『法華経論』注釈書の中で義寂、元暁、義相を引用する例は想定できないからである。

## 2 引用文献の検討

まず、元暁の痕跡を三件程度見出すことができる。

第一、『経論』巻上(における)「如来が説法しようとする時が至ったことが成就される(如来欲説法時至成就)」(『大正』二六・二下)の「十五、第一義住者」(同右・三上、について)『子注』では次のように叙述する。

これは第一の教説である。初めは名称を列挙して、次に意義を解釈する。これは則ち名称を列挙したものである。諦には二つがある。第一は世諦、第二は真諦である。如来の法身はこの二諦の外に独り二諦がない境地に存在するため第一義諦というのである。この『法華経』は「※法身を」顕すために「住」としたのである(此則第一義教。先列名。彼釈義。此則列名。然諦

有二種。一世諦、二真諦。如来法身出此二諦之外独在無二、名爲第一義諦。從此経顕。故名住)(巻物ファイル0000023、以下「二三頁」とする(上巻・二〇紙))※吉蔵の『法華論疏』(『大正』四〇・七九三下)を通して補足した。

俗諦と真諦を超えて第一義諦が存在するというこの説は三論宗の主張に属するが、第一義諦の境地に如来法身が住するという『経論』の趣旨を円弘が三論宗の主張によって解釈したものとみることができ(30)。ところで、この中で「二諦之外独在無二」という文句は元々は『本業経』に次のように出てくる。すなわち、經典では第四十二地である妙覚地の説明には「一念、一時に不可思議に住することを知ることができる。それは二諦の外に独り二諦がない境地に存在することである(亦一念一時、知住不可思議、二諦之外独在無二)」(『大正』二四・一〇一五下)となっているため「住」に対する説明であることが分かる。円弘が『本業経』を一回引用するためにこの文句は『本業経』から直接持ってきた可能性が高い。ところで、この文句を引用するのは元暁の『本業経疏』・『金剛三昧経論』・『両巻無量寿経宗要』からみえ、元暁が重視した文句と理解することができる。円弘以前には引用例を見出すことができない(31)。このようは状況を通してみる時、円弘が元暁の著述を読んだ可能性に重きを置くことができる。

第二、下巻では「煩惱に汚染された性質を具えた七部類(七種具

足煩惱染性人）（六紙一面、の一釈初七章の一病人の二列名）について十門に分けて説明しているが、その中の初めが「凡聖門」である。この「凡聖門」という表現は元暁以前の文献では『涅槃宗要』『大正』三八・二四三上）だけが唯一に使用する用語である。

第三、すでに指摘したように下巻に使用される「法花宗要」（一六紙四面）という表現から元暁の痕跡を見出すことができるのではないかと提案したことがある。<sup>32</sup>このような三件の文章及び用例を通してみる時、円弘から元暁の痕跡を十分に認定することができるものと考えられる。

次は義相の痕跡が一件確認される。

下巻には「別意如是」という表現がしばしば使用される。例を挙げると、「第一は正しく論破することであり、第二は論破した利益である。大きい邸宅とは、すでに正しい論破であるため、具体的に「譬喩品」に説かれている。区別した意はこのようである（初一正破。後二破益。大宅既正破故、徧拳説譬喩品。別意如是）」（九紙一面）となっているが、下巻には各品について似たような文章形式で総六回使用する。

ところで、「別意如是」という表現は義相の『華嚴一乘』法界図（以下『法界図』と略称する）にだけ「そのため論で聖人の智慧境界としたのである。区別した意はこのようである（是故、論言聖智境界。別意如是）」（『大正』四五・七一三中）のように一回みるこ

とができる表現である。たった一回の同じ用語を果たして義相の痕跡であると言えようかという疑問が起こることもあり得よう。

ところで、下巻では特殊な用語を使用するほかの例がある。それは「心をおだて上げること」を本性とする（心拳為性）」という表現である。例を挙げると「この中で七つの驕慢は論破されるべき病を顕す。得ていないのに得たことである。心をおだて上げることを本性とするため、これを増上慢心というのである（此中七慢、顕所破病。未得謂得。心拳為性。是名増上慢心）」（五紙三面）という文章がある。これは『大乘阿毘達磨集論』（無著菩薩造、玄奘訳）或いは『大乘阿毘達磨雜集論』（安慧菩薩糝、玄奘訳）の七慢に関する部分から借りた文句として（これらの）『論』では七回使用されるが、円弘の説明が『論』の七慢と合致されてはいない。円弘はこの句だけを取ってきて十回使用するが、この句はほかの文献ではまったく使用されることがない。このような例からみて円弘が義相の『法界図』から「別意如是」だけを取ってきて使用することができるであろうと考えられる。

ここまである程度円弘が元暁と義相の文献をみただであろう痕跡を十分に認定することができるであろうとみる。ところで、義叙の痕跡を見出してみる時、より正確に円弘が義叙の文献をみただであろう可能性を高めてくれる。

義叙の痕跡を二件程度見出すことができる。

「第一」『経論』巻上の「大衆が教法を聞くことを欲することが現前する成就（六大衆欲聞法現前成就）」（示現大衆欲聞現前）「法」成

就の誤り、『大正』二六・三中)の「大瑞相を現すことは如来が得た妙法、不可思議な文句などを教説するためである(現大瑞相、為説如来所得妙法、不可思議等文句故)」「(同右・三中)について『子注』をみると次のとおりである。

これは第二門に対する解釈である。「妙法」は証甚深である。「文句」は阿含甚深である。「不可思議」は甚深の意味である。世尊が大瑞相を現すことはこの二つの甚深を顕すためである(此釈第二門。妙法者、是証甚深。文句者、是阿含甚深。不可思議者、是甚深義。世尊現大瑞相、為顯此二甚深法故)(二・六〔七〕頁〔上巻・二四—二五紙〕)

となっている。「証甚深」と「阿含甚深」の二種の甚深は『法華経論』「方便品」に言及される概念である。<sup>(33)</sup>ところで、この『経論』「序品」の文句について二種の甚深を通して注釈する例は義寂の『述記』において次のように見出すことができる。

「大相を現す」とは、眉間の光明で東方の一万八千土を照らすことである。「妙法蓮華経を説くため(の故)である」とは、「証甚深を説くため」である。「大瑞相(を現す)」とは、即ち(これ)花の雨が地を振動させることである。「如来が得た妙法と不可思議な文字章句を教説するために」とは、「阿含甚深を説

くため」である。仏が眉間から光明を放つことは、「証甚深を説く(ための)こと」である。「妙法蓮華経」は、「即ちこれ」証甚深で(の故に)天から四つの花の雨が降る。「六種振動」などは、「阿含甚深を説くための瑞相(阿含甚深の瑞相を説くためと読むべきか)」である。「不可思議名字章句」は、即ち(これ)阿含甚深である(現大相者。眉間光明、照于東方万八千土也。為説妙法蓮花経故者、為説証甚深也。現大瑞相者、即是雨花動地也。為説如来所得妙法、不可思議等文字章句故、為説阿含甚深也、仏放眉間光、為説証甚深也。妙法蓮花経者、(即)是証甚深故、天雨四花。六種振動等、為説阿含甚深之瑞也。不可思議名字章句者、即是阿含甚深也)(『中統蔵経』四六・七九〇下)

このように義寂は仏が眉間から光明を放ち東方の国土を照らすことを「大相を現すこと」であるとして、「(妙)法(蓮)華経を教説するために」という文句を「証甚深を説くために」と解説して、「如来が得た妙法と不可思議な文字章句を教説するために」という文句を「阿含甚深を教説するために」と理解する。また仏が眉間から光明を放つことを「証甚深を説くためのこと」と、「妙法蓮華経」をなお証甚深とみて、「六種に振動すること」を「阿含甚深を説くための瑞相(同右)」とみて、「不可思議な文句」という文句を阿含甚深とみている。

円弘は「不可思議」を別に切り取って「甚深に内包された義」であるとみているが、『經論』「序品」の同じ文句について二種の甚深で解釈する点において義寂の痕跡を見出すことができる。ところで、このような解釈は慧浄（五七八―六四五／六五三）の『法華經續述』〔以下『續述』と略称する〕においても次のようにみることができ<sup>(34)</sup>る。

如来が大相を現す原因を顕したために衆生たちが因縁の法則を疑うために、即ちこのために法華經の二種の甚深を説くのである。得た妙法は、〔即ち〕証甚深であり、不可思議な文句は、即ち阿含甚深である（為顕如来現大相之因。是故生疑因縁、即是為説法華二種甚深。所得妙法、即証甚深。不思議文句、即阿含甚深）〔『續述』卷第二・一七丁ウ〕

すなわち、如来が衆生のために大瑞相を現したのであるが、むしろこのために衆生たちが因縁法について疑ったため、『法華經』においては二種の甚深を教説するということである。この時、如来が得た妙法は証甚深であり、不可思議な文句は阿含甚深であると説明している。

おそらく慧浄のこのような解釈を義寂が援用したのであろうが、円弘の説明方式は義寂よりは慧浄により近い。ただ、「不可思議」について別して意味を置くことからみて、円弘が慧浄と義寂の文献

を読んで自身の文章として展開した可能性を念頭に置くことができる。

〔第二〕ところで、義寂の『述記』の文章と一致する例を一つみることができ<sup>(35)</sup>る。『經論』「序品」「成就十事」〔『大正』二二六・三三下〕の中で初め〔の項目〕である「大義の原因が成就されたことを現在にみることに（現見大義因成就）」〔同右・三下〕では八句で現示するが八句を取り上げた後に、さらに具体的に説明する（円弘の科段は徴問〔別釈の誤り〕である）。その中で初めの句が「大法を論じようとする」（一者。欲論大法）〔同右・四上〕である。そしてこれに対する具体的説明である「疑いのある者が疑いを断つようにするためである（謂有疑者、為断疑故）」〔同右・四上〕について次のような円弘の『子注』がある。

大法を論じようとすることは我々の信じられない者たちのため信じることを成就しようとするのである。「論」は「教説」である。異なる名で説くことは、「二つ目の説明の」雨を降らすという説明などの後の七つの意味も同じようである。「大法」とは一乗大法である。ここには三つがあり、性、随、得である（欲論大法、令我不信、成就信心。論者説。説異名、雨等、後七義亦同爾。大法者、一乗大法。此有三種、謂性、随、得）（\*二六〔三二〕頁〔上卷・二八紙〕）

この文章で「大法」とは一乗大法である（大法者、一乗大法）」という説明は義寂の『述記』にだけみられる文句である。義寂はこの初めの句について次のような説明をする。

第一の大法を論じようとするとは何であるか。疑いを断つ大義を顕すことである。大法は大乘法である。大乘法には三つがあり、性、随、得である。性は即ち真如である。随は即ち智福である。得は〔即ち〕四徳の結果である（第一欲論大法。云何。<sup>※</sup>願断疑大義也。大法者。是大乘法。大乘法有三義。一性、二随、三得。性者、即真如也。随者、即智福也。得者、即四徳果也）（『中統藏経』四六・七九一下）※「願」の字は後の慧浄の原文をみると「顕」の字に作るべきである。

吉蔵師が云うには大法を論じようとするに於いての大法とは〔即ち〕一乗大法である（蔵師云。欲論大法者。大法者、即一乗大法。今説一乗故。即断旧新二疑之心）（『中統藏経』四六・七九一下）

となつてゐる。二つ目の文章において義寂は「大法とは〔即ち〕一乗大法である（大法者、即一乗大法）」について吉蔵から引用したように叙述するが、吉蔵の著述では同じ文句を見出すことができない。すなわち、義寂自身の表現である。<sup>35)</sup>一方、義寂が引用する慧浄の『續述』をみると、義寂と相当部分一致して、義寂が慧浄を援用

したとみられるが、これと同じ表見を見出すことはできない。<sup>36)</sup>したがって、現在としては円弘が慧浄の『續述』と義寂の『述記』を参照してこのような説明をしたとしかみることができない。

## IV 結論

円弘の著述は七三一年にすでに『円弘師章』と『子注』が筆写される。すなわち、円弘が七三一年以前に著述したということであるが、このような円弘の活動年代を念頭に置いて円弘が新羅人であるということを証明するため大きく二つの方法を使用した。一つは円弘に対する情報を通して円弘が新羅人であることを証明する方法であったのであり、二つ、『子注』の引用文献を通して円弘が新羅人であることを証明する方法であった。

一つ目の方法を通しては、まず安然の『教時諍論』において法相唯識の基と対比される新羅人のグループに円弘が入っているという事実を挙げた。玄奘の五姓各別説に対する反対は旧唯識派が中心になつてゐたが、新羅では玄奘の門下である義寂にせよ留學をしないで新羅で修學した〔僧侶〕にせよ、ほとんどが基とは反対の意見を開陳した。このような主張は少なくとも玄奘―基―慧沼―智周につながる玄奘（より）の中国人僧侶たちには見当たらない態度である。また逸文を通してみた時、安然の主張に妥当性があることを確認したのであり、新羅表員の『要決問答』と説明方式が一致することを

証明した。そして新羅と関連のある護命が暗誦したものが『円弘師章』であったという事実も重要である。円弘の『円弘師章』を注釈した理門の復注を目録から確認したのであるが、彼は太賢の著述にも復注を著述するなど、護命と似たように新羅法相唯識の著述を尊重した。

二つ、『子注』の引用文献を通しては元暁、義相、義寂と一致する例を、各々三回、一回、二回程度を見出して証明した。その中で義寂の一例は文章が正確に一致して、元暁の二回と義相の一例は用語が正確に一致することを確認したのであるが、先に言及した新羅表員の著述との関連を考慮すると〔円弘が〕新羅僧侶の著述を読んだと断定することができる。ただ、引用事実を通して円弘が義寂より後の人物であるという証明にはならない。同時代に活動したとみられることもできるからである。したがって、活動年代についてはまだ確定することができないが、当時、新羅の華嚴と唯識の大家たちの著述をみたという点は間違いない。

このような二つの方法を使用して証明した時、円弘が新羅人であることが間違いないと断定することができる。『円弘師章』の逸文が集められているのであり、『子注』は「序品」の全体と「譬喩品」の一部が写本として現存する。『子注』には吉蔵の『法華論疏』・『法華義疏』が最も多く援用され、慧浄の『法華経續述』の内容もしばしば援用される。

一方、写本をより綿密に検討すれば、新羅僧侶の文献を引用した

痕跡をさらに見出すことができるであろう。このような問題を含めて、今後、細密な注釈を通して、もう一つの新羅人の注釈書、円弘の『法華経論子注』について研究して、義寂、元暁、憬興など、新羅僧侶と比較して、新羅人の法華思想史に追加すべき課題が残っている。

## 注

- (1) 具体的には元魏中天竺三藏勒那摩提共僧朗等訳〔大正〕二六〇と後魏北天竺三藏菩提留支共沙門曇林等訳〔大正〕二六〇。
- (2) 大竹晋校註『法華経論・無量寿経論他』大蔵出版、二〇一一の解題（二二八―一三〇頁）に中国、新羅、日本の注釈書に対する説明が詳しい。著者が日本僧侶の著述の中で円珍『法華論四種声聞日記』一卷については真作であるかを疑っているため本文では除外した。
- (3) 落合俊典編『中国・日本経典章疏目録』大東出版社、一九九八、一四六頁。
- (4) 〔勝崎裕彦他編著〕『大乘経典解説事典』北辰堂、一九九七、九三頁。
- (5) 朴姚娟『法華経論述記』韓国哲学辞典編纂委員会『韓国哲学辞典——用語編・人物編・著述編——』東方の光、二〇一一、一九二―一九三頁。
- (6) 大竹晋校註、前掲書、一二九頁。
- (7) 朴姚娟『新羅法華思想史研究』慧眼、二〇一三、八八―一一六頁。
- (8) 金天鶴「金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華経論子注』について」『印

仏研』第六〇卷第二号、二〇一二、一五四—一六一頁。この論文は日本の大竹先生の勧誘で円弘の『法華經論子注』を金沢文庫から複写して基礎的研究を日本語で発表した論文である。本稿は以降に新たに入手した聖語藏本『妙法蓮華經論子注』を併せて報告する場として、以前の論文内容の中で必要な部分は相当に改訂或いは拡大して活用した。ただ、一部分は以前の研究内容と重複され、そのような部分については一々脚注を付けることにする。

(9) 末木文美士『平安初期仏教思想の研究——安然の思想形成を中心として——』春秋社、一九九五、一八三—一八八頁。ここでは『教時諍論』について文献学的に詳しく言及している。

(10) 大竹晋校註、前掲書、二二九頁。

(11) 『安然』『教時諍論』「三藏門人、義寂法師作義林章十二卷、以破基師法苑林章。通倫法師作瑜伽疏、所立義理多違基義。玄隆、円弘、補助、秦賢、並作章疏、共称稟受三藏之旨、而多違背基師之義」(『大正』七五・三六五下)(補〓神、泰〓太の誤り)

(12) 『宗性』『日本高僧伝要文抄』第三「護明僧正伝云。年甫十歳(薇恐歳)、受道於当洲金光明寺道興(大)法師。比及同年、既涉法華最勝二部音訓、暗誦百論\*並(并)側(側恐測)法師疏一卷、円弘師章四卷(『仏全』一〇一・六一(上))。円測の著述に『百論疏』はないため『百法論疏』と推定される。富貴原章信『日本唯識思想史』大雅堂、一九四四、三三七頁。

(13) a. 護命『大乘法相研神章』卷第三「既言法体先有、不可言生、

何有生滅耶。或亦可言法体先有、不可言滅。是故法体有生滅者、愚之甚矣。彼新羅国順本法師現在之日、老僧生年十七(七十三、甲・乙本)之時、親聞彼言。諸有為法体、不生滅而帶生滅、名為有為。若爾、無為体不生滅而可帶生滅、不得通此難。作如是說、非本習伝義、非唯違文、亦復乖理。有為法体、若有生滅、過未法体在何処所顯。過未無体。何言三世恒有実体顯」(『大正』七一・二八下)

b. 凝然『華嚴經探玄記洞幽鈔』卷(第)七十八「昔新羅国智平法師。立有為法体、不生不滅義。元興寺護命僧正、用智平義、立不生滅道理」(『日藏』一・二\*六(八)二下)

c. 凝然『三国仏法伝通縁起』卷中「護明僧正伝新羅智平法師義。建立有為法体、不生\*不(ト)レ滅義。余先徳等、多是有為法体生滅義(也)」(『仏全』一〇一・一一九\*下(上))

この三資料を通して思想的に同じ趣旨の主張を護命が堅持していることが分かるのであるが、aの資料は護命自身が告白した内容であり、これを凝然のb・cの資料からも確認することができる。ただ、aの十七はほかの本では七十三である。ここでは後者を取ることにする。そしてaとb・c資料の新羅僧名が順本(a)と智平(b・c)で互いに異なる。どちらが是であれ非であれ、護命が出家の頃から新羅僧侶の学説を最晩年まで堅持した事実には変わりがない。

(14) 金天鶴、前掲論文、一五五頁。「円知師章」と誤って記録された例も新たに確認された。

(15) 金天鶴、前掲論文、一五五頁。

- (16) 落合俊典編、前掲書、一四六頁。
- (17) 金天鶴、前掲論文、一五六頁。
- (18) 本書は金剛大学校仏教文化研究所ホームページ [http://gcbss.gju.ac.kr/sub02\_8/] に全文を公開している。
- (19) 岡本一平「東大寺図書館所蔵 凝然『華嚴二種生死義』について」東アジア仏教研究会発表資料、二〇一三〔東アジア仏教研究』第二二号、二〇一四、一七五頁〕。また浄土宗全書検索システム [http://www.jozensearch.jp/] でも一回確認される。もちろん研究が進展されるにつれより多くの逸文が発見されるであろう。
- (20) 金天鶴、前掲論文、一五六頁。
- (21) 岡本一平「新羅唯識派の芬皇寺玄隆『玄隆師章』の逸文研究」『韓国仏教学 SEMINAR』第八号、二〇〇\*一〔〇〕、三六〇―四〇一頁では、玄隆が玄奘系と真諦系を会通させる一面が報告されている。
- (22) 『仏全』一三・四一〇下。
- (23) 例を挙げると〔表頁『華嚴經文義要決問答』巻第一〕「三門分別。第一積名、第二出体、第三問答分別」〔『正統藏經』八・四一四上〕となっているものであり、この中で「問答分別」は「問答」とだけなっている例もしばしばある。
- (24) 落合俊典編、前掲書、三六〇頁。
- (25) 落合俊典編、前掲書、三六四頁。
- (26) 金天鶴、前掲論文、一五六頁。
- (27) 周生杰「合本子注疏論」『浙江师范大学学报—社会科学版』二〇〇

六年第二期、二〇〇六、四一―四六頁。

- (28) 『法鏡經解子注』二卷〔五九中〕、維摩詰子注經五卷〔七三上〕、遺教子注經一卷〔九六中・九六下〕、勝鬘子注經三卷〔九六下〕、大般涅槃子注經七十二卷〔九九中〕、摩訶般若波羅蜜子注經五十卷〔九九中〕、大乘經子注目錄三〔二二六上〕（以上『歷代三寶記』〔『大正』四九〕）
- (29) 金天鶴、前掲論文、一五七頁。
- (30) 『法華經論』卷上〔十〕五名第一義住者、以此法門、即是諸仏如来法身究竟住処故〔『大正』二六・三上〕。本稿では具体的に明かしていないが、円弘の『子注』には吉藏の著述がしばしば援用されている。
- (31) 『本業經疏』〔卷下〕「復次不可思議有二種。一者、不可言說。過語言境界故。二者、出一切世。於世間中無譬類故。是名不可思議。故第四德中、言二諦之外独在無二者…」〔『正統藏經』三九・二四二下〕
- 『金剛三昧經論』〔卷中〕「金剛解脫斷種子已。即入妙覺無住之地。二諦之外、独在無二故、言無住」〔『大正』三四・九九中〕
- 『兩卷無量壽經宗要』「欲明如是大円鏡智、超過三智而無等類、二諦之外、独在無二」〔『大正』三七・一三二中〕
- このほかに元暉の『法華宗要』〔『大正』三四・八七二上〕でも『本業經』を引用して「二諦之外独在無二」というのである。これにより元暉にとっては特別な文句であったことが分かるのである。一方、円弘が引用する『本業經』の文は「若凡夫衆生住五陰中為正報之土」〔『大正』二四・一〇一六上、上巻・四紙〕であるが、この文句もなお元暉の『兩卷無量壽經宗要』〔『大正』三七・一二七上〕・『本業經疏』〔典拠不明・

誤りか)に引用され解される。

(32) 金天鶴、前掲論文、一六\*一(〇)頁。(この点については訳者による指摘がある。詳しくは金炳坤『「三平等義」の成立に関する研究』(身延山大学仏教学部紀要)第一七号、二〇一六、九頁を参照されたい)

(33) 『法華経論』巻上)「言甚深者、顯示二種甚深之義、応如是知。何等為二。一者証甚深。謂諸仏智慧甚深無量故。二者阿含甚深。謂智慧門甚深無量故」(大正)二六・五上)

(34) 金炳坤『法華章疏の研究——海東撰述・西域出土本を中心として——』(立正大学博士論文、二〇一三の第三編の第二章と第四章に慧淨の『續述』について詳しい。『續述』のテキストは金炳坤先生の好意で得て検索することができた。この紙面を借りて感謝申し上げたい。

(35) すでに指摘されているように、後ろの「即断旧新二疑之心」という文句が古蔵『法華論疏』から取意(『大正』四〇・七九八上)したものである。三友健容「義寂撰『法華論述記』の一考察」村中祐生先生古稀記念論文集刊行会編集『大乘仏教思想の研究』山喜房仏書林、二〇〇五、一三三頁。ただ、文章は義寂の特有の表現であるという意味である。

(36) 『法華経續述』「第一欲論大法。云何。顯断疑大義論量也。大法、大乘法也。大乘法有三義。一性、二随、三得。性即真如、随即福智二行、得即四德果」(『續述』巻第二・三四丁才)

(この論文は二〇一一年度政府(教育科学技術部)の財源により韓国研

究財団の支援を受け研究された(NRF-2011-361-A00008))

(キーワード)

円弘、法華経論、法華経論子注、円弘師章、新羅僧侶

(付記)(訳者)

本稿の韓国語原文は、東アジア仏教文化学会(<http://www.easterasakr>)の学会誌『東アジア仏教文化』第一七輯(二〇一四年三月三十一日発行)に掲載(一八五—二〇八頁)されている。著者である金天鶴博士(東国大学校仏教学術院韓国仏教融合学科教授)が原文冒頭の脚注において「この論文は二〇一\*二(三)年十一月二十九・三十日の間に開催された金剛大・東国大(HK事業団)共同国際学術大会で発表した論文を改訂したものである」と記しているように、もとは、その時の資料集である『忘れられた韓国の仏教思想家——新資料の発掘と思想の発見——』の中に「もう一つの新羅僧侶『法華経論』注釈書について」というタイトルで掲載(二七五—二八六頁)されている。またこれに次いでこの論文に対する訳者の論評が韓国語で掲載(二九七—三〇二頁)されている(<https://www.academia.edu/40660501>)が、これについても近いうちにその日本語訳を公開する予定である。

最後に、本稿の翻訳ならびに掲載を快く許可していただきました恩師の金天鶴先生に深く感謝申し上げます。また、日本語訳のネイティブチェックにご協力いただきました岡本一平先生(東洋大学東洋学研

円弘は新羅僧侶か（金天鶴）

究所客員研究員）に厚く御礼申し上げます。

※文中の\*アスタリスク・〔亀甲括弧〕は訳者によるものである。

日本語訳・金柄坤（身延山大学准教授・博士（文学））